

陸前高田市の仮設住宅で「夜のお茶っこ会」を開催

男性や働く人も来れるお茶っ子会

コープかながわでは、2012年6月30日、岩手県の陸前高田市にある2カ所の仮設住宅で「夜のお茶っこ会」を同時開催しました。この会は、コープかながわが、被災地で本格的に取り組む初めての活動です。今回は、コープかながわの職員、組合員理事、活動企画委員の計14人と、コープとうきょうの職員2人が参加しました。

今回のきっかけとなったのは、2012年3月23日、いわて生協監事・被災地支援担当の飯塚郁子(いづかいくこ)さんがコープかながわを訪れ、被災地の報告会を開催したことでした。何か被災地での取り組みをしたいと考えていたコープかながわの関係者に飯塚さんは、「夜のお茶っこ会をやってみては?」と提案しました。

お茶っこ会は、通常昼間に開催され、参加者のほとんどは女性です。仕事がある人は参加できませんし、男性が参加しても、女性が大半を占める環境では、居場所がないと感じ、来なくなってしまうといえます。そこで飯塚さんは、お酒やおつまみなどを出し、男性でも来やすい夜にお茶っこ会を開催することを思いついたのです。

開始時間の18時になると、集会場には続々と仮設住宅の居住者がやってきました。参加者の数は、女性と子供が17人、男性が8人で、集会場はすぐにいっぱいになりました。

男性たちはお酒を飲みながら、被災したときの様子や、今後の復興について話し合っていました。30歳前後から70歳前後の方まで、幅広い世代の男性が参加しました。

いわて生協の飯塚郁子さんは、「これまで昼間のお茶っこ会では、見たことのない方がいっぱいいらしていました。とてもうれしかったです。また、コープかながわとコープとうきょうからの参加者の皆さんは、何かをやってあげようとしすぎず、適度な距離感を保ち、居住者同士が語りあえる非常に居心地のよいお茶会を開催していただきました」と話していました。

また、コープとうきょうの参加とネットワーク推進室企画担当の大矢憲二(おおやけんじ)さんは、「今回初めて行なわれる夜のお茶っこ会の様子を、ぜひ見たいということで参加させてもらいました。これまでの経験から、ボランティア活動では、本当に小さなことしかできていないと実感してきました。今回の様子も踏まえて、被災地のためにできることや、やるべきことを突き詰め、今度の活動に活かしていきたいです」と話してくれました。



西風道(ならいみち)仮設住宅は、30世帯ほどの小規模仮設住宅。子どもをつれたお母さんや年配の女性は、お茶を飲みながら交流。

人と人をつなぎ、生きるを支える

コープかながわの組合員理事の斎藤好江（さいとうよしえ）さんは、「仮設住宅の居住者の男性の方たちが集まると、自然と話がはずみ、お互いに自分の被災したときの状況やこれからのことを、本音で話されている様子が印象的でした。初めて会う私たちに深い話はなかなかできないと思います。みなさんが話し合える場を作ることがまずは大切だと感じました」と語ってくれました。

また、コープかながわの組合員理事である小石淑子（こいしよしこ）さんが手掛けた布草履が居住者にプレゼントされました。「布草履は、余ったはぎれなどを使うためエコロジー、かつ、指を広げるため適度な刺激があり健康的です。

また、作る場合は手先を使うのでボケ防止につながります。被災地で布草履を生産し、事業化できる可能性もあります」と小石さん。被災地の人々の健康と、地域の活性化などを見据えた、さまざまな思いが込められています。

コープかながわは2020年ビジョンとして「人と人をつなぎ、生きるを支える」を掲げています。その理念を胸に、今後、一つひとつ経験を積み重ね、改善しながら、継続的な支援を行っていく予定です。今後は、組合員ボランティアが参加できるように、現在募集と登録を行っています。



男性を中心に、お酒を飲みながら、被災当時のことや今後のことを話していた。これだけ多くの男性が参加するのは初めてのこと。